



Title	『今業平昔面影』五編における鯉の利用：『八犬伝』ブームと笠亭仙果の著作活動に注目して
Author(s)	樋口，純子
Citation	詞林. 2024, 76, p. 27-45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/98181
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『今業平昔面影』 五編における鯉の利用

——『八犬伝』ブームと笠亭仙果の著作活動に注目して——

樋口 純子

はじめに

『伊勢物語』を題材とした合巻に、笠亭仙果作『今業平昔面影』(七編二十八巻のうち六編二十四巻が現存、歌川芳虎・国輝画、嘉永三年(一八五〇)―六年(一八五三)刊、和泉屋市兵衛板)(以下、『今業平』)がある¹⁾。『今業平』以外では、東里山人の『風俗伊勢物語』(十編四十巻、天保七年(一八三六)初編刊、嘉永二年(一八四九)に刊行された七編より笠亭仙果が担当)、立亭光彦『鄙物語業平双紙』(四編十六巻、安政元年(一八五四)初編刊)があるが、これまで『伊勢物語』の合巻に関する研究はなされてこなかった。それは、中村幸彦が指摘する『伊勢』がその本来の文学性を全く捨てて、部分的素材を提供するのみで終わっている²⁾という懸念のためである³⁾。

しかし、短編の『伊勢物語』を、どのような工夫を施して長編化することができたのかを考えることは、それぞれ戯作

者としての評価に繋がると考えられる。特に今回取り上げる仙果は師である柳亭種彦の『修紫田舎源氏』の後続作を三種類制作しているが、どれも途中から書き継いだ嗣作であり、初めから仙果が担当したオリジナルの作品ではない。また、『修紫田舎源氏』という、すでに合巻化された作品の継承ではなく、平安朝物語を題材としたオリジナルの合巻と考えると、やはり『今業平』を考察することは、仙果の独自性を考察するうえで重要だと考えられる。

『今業平』は主人公の玉川千之丞が、生みの親の義理を果たすため、盗まれた短刀とそれに添えた小倉色紙を探す旅を描いた話である。筆者はこれまで、『今業平』の初編から四編をとおして、序文に示されている『伊勢物語』や『好色一代男』の他に、歌舞伎「けいせい浅間嶽」(元禄十一年(一六九八)初演)とそれから派生した浅間物、また、仙果が師事していた人物の作品、例えば柳亭種彦の随筆『還魂紙料』(文政九年(一八二六)刊)、仙果自身が携わったと考えられ

る地誌『尾張名所図会前編』（天保十五年（一八四四）刊）を利用してゐることを明らかにした。⁴これらの先行作品には、『伊勢物語』の主人公である昔男や、八段「浅間の嶽」といった土地に関連する要素があるため、『伊勢物語』を題材にした合巻に利用した作品としては妥当な選択と言えるだろう。

しかし、『今業平』五編（嘉永五年（一八五二）刊）になると、『伊勢物語』との関連性が一切認められない要素が登場する。五編の序文には、

四編の下より本編は武蔵国入間郡三芳野にて、田面の雁もひたふるにと、藤原氏の嫗の咏て賀兼へ贈し段を八橋と宇津山の間へ引上、三代の朝廷に仕奉し紀有常の舊妻去し悲い話も引上、序に隅田川の場合よりも先へ面影ばかりに句はして御覧に入んと其端を發く。枯枝の花の御所手妻で染る紅葉もよしや義満公を漢の武帝唐の玄宗皇帝のやうにやつたらかきのめす猿唐人の神仙傳蓬萊綿の和き魔術つかひは些ばかり目先をかへたつもりなれど、どう見ても猶古いのが昔男の面影故と道理をつけても面影も、何処へやら立消して、闇の打磔の當りの外、あぶないこととするくも、今年も筆をとりか啼東国下りの道草をくだらぬ序文でお詫申すは例の駄作者

とある。傍線部では、仙果が五編に「魔術つかひ」を登場さ

せ、読者の目先を変えたつもりだったが、『伊勢物語』の昔男の面影はどこかへ行ってしまったと反省している。「魔術つかひ」が五編に登場するのは、五編下の十四丁裏から十九丁表とわずかに五丁分であるが、その中では「魔術つかひ」と同様に『伊勢物語』には登場しない鯉も描かれている。

なぜ仙果は「魔術つかひ」や鯉を『今業平』五編に登場させたのだろうか。中村幸彦が言うように、⁵長編化するための苦肉の策だったとするのは早計であろう。なぜなら前年の嘉永四年（一八五一）に刊行した三編の下から鯉に繋がる要素が登場していると考えられるためである。そこで、本論文では、五編に「魔術つかひ」や鯉が登場した理由について、三編下の本文や挿絵からの繋がりを確認し、五編での挿絵における描かれ方や本文の展開において、仙果の著作活動が影響していることを明らかにする。

一、鯉にまつわる土地の利用

本節では、仙果が『今業平』五編で「魔術つかひ」や鯉を登場させるために三編下からその傾向を見せていたことを確認していく。

一―、道中双六の利用

『今業平』三編下から四編上（五編と同じ嘉永五年（一八五二）刊）において、桑名神社に到着した千之丞は、



図1 『今業平』三編下（20ウ）

げにも咲二は照るばかり、装ひ飾り四五人の若き腰元もろともに道中双六中に置き

と、既に死んだはずの、そして乳母子で恋人だった咲二が道中双六を楽しむ数人の腰元と一緒にいるところに遭遇する。そして、道中双六を見た千之丞は、

「これは変はつた道中双六、東海道の名所の絵尽くし、池鯉鮒の宿といふところに描いてある杜若八橋はおれが在所。」

と、道中双六の池鯉鮒のマス目に杜若が描かれていることに気づく（図1）。

ここで注目したいのが、傍線部の「変はつた道中双六」である。何が「変はつた」道中双六であり、なぜ、仙果はその道中双六を『今業平』に取り入れる必要があったのだろうか。

道中双六とは、種彦の『還魂紙料』に「宝永正徳の比より専ら流行しもの」とあり、山本正勝によれば、「芝居や物語、また歌謡などの題名にもよくとり入れられた。歌舞伎で有名なのは、「伊賀越道中双六」、清元の「青楼春道中双六」がそれであり、また、近松の「丹波与作待夜小室節」では、東海道五十三次を詠みこんだ浄瑠璃のうたわれる場面がある」ことがわかつている。合巻の典拠を明らかにするため、まずは演劇の利用について考えてい⁽⁸⁾。

『今業平』五編が刊行された嘉永五年（一八五二）の前年には、「丹波与作待夜の小室節」（宝永四年（一七〇七）頃、竹本座初演）の改作物「恋女房染分手綱」（宝暦元年（一七五一）、竹本座初演）が大坂で二回、「伊賀越道中双六」（天明三年（一七八三）、竹本座初演）が江戸で七回上演された。『今業平』と同時代の演劇の流行という点では、「伊賀越道中双六」が影響したと考えられるが、『今業平』には「伊賀越道中双六」に描かれる敵討物の要素はない。むしろ、道中双六に興じる様子は「恋女房染分手綱」に描かれている。元となった「丹

波与作待夜の「小室節」の同じ場面にも、

これ／＼御覽ぜ、打たしやんせ。これこそ五十三次を、
居ながら歩むひざ、膝栗毛馬、はいしだい中双六、南
無諸仏分身と、書いた六字を六角の、骰子は桜木、花の
都を真ん中に、思ひ／＼の印を置いて、さらばこちらから
うちでの浜、大津へ三里、（中略）火打の石薬師、おつ
と桑名の舟渡し、宮へ上があれば、池鯉鮒の四里の、宿に
ころりは、岡崎女郎衆…（上之巻、由留木殿屋敷の場）

と、調べの姫が腰元と道中双六に興じており、内容の一致という点では、「丹波与作待夜の「小室節」とそれに関連する浄瑠璃が影響したと考えられる。

また、道中双六を利用した戯作、特に『今業平』と同じ合巻では、式亭三馬の『忠孝振分道中双六』（文化六年（一八〇九）刊）¹²、柳亭種彦の『新彫翻案道中双六』（文政四年（一八二二）刊）¹³、柳下亭種員の『復讐道中双六 前編』（弘化二年（一八四五）刊）¹⁴の三作品が刊行されており、これらの作品は「丹波与作と待夜の「小室節」とそれに関連する浄瑠璃を利用している。

「伊賀越道中双六」流行の影響は決して捨てきれないものの、内容の面や、同じ合巻における道中双六の利用という点からは「丹波与作と待夜の「小室節」とそれに関連する浄瑠璃の影

響が大きいと考えられる。

一―二、池鯉鮒と『伊勢物語』のイメージ化

本文で語られる「変はつた道中双六」とは何が「変はつた」もののなかについて、再び『今業平』三編下に描かれた道中双六に注目したい。この道中双六には、前述のとおり、池鯉鮒のマス目に杜若が描かれている（図1―A）。

ここで、実際に刊行された道中双六の池鯉鮒のマス目に描かれたものを確認したい。『今業平』と共通点が見られるものとの比較になるが、『今業平』と同じ和泉屋から刊行されたものでは、広重が描いた「五十三駅東海道富士見双六」に名物の馬市（図2）、豊国が描いた「東海道名所入新版道中双六」に鳴海に通じる境橋（図3）が描かれ、『今業平』五編と同年に刊行されたものでは、芳綱が描いた「五拾三次新版道中双六」に知立神社が描かれている（図4）。管見の限りでは杜若が描かれた道中双六は確認できておらず、池鯉鮒のマス目に杜若が描かれたことが「変はつた」ことであると考えられる。

一方、浮世絵では池鯉鮒が『伊勢物語』を象徴する土地であることを示した作品が刊行されている。『今業平』刊行の少し前に刊行され、広重らが描いた「東海道五十三対」（天保十四年（一八四四）から弘化四年（一八四八）刊）（図5）や、『今業平』五編と同年に刊行され、豊国が描いた「役者



図3



図1-A



図4



図2



図6



図5

見立東海道五十三駅」には業平が描かれている（図6）。このように、地名と文学作品のイメージ化は、『今業平』刊行と同時代に行なわれ始めていた。

もちろん、『今業平』が『伊勢物語』を題材にした合巻であるために池鯉鮒のマス目に杜若を描いたのであるが、それでは地名は池鯉鮒ではなく、八橋を出せばいい話である。なぜ、わざわざ道中双六を用いてまで池鯉鮒という地名を登場させたのかを考える必要がある。これについては本文をもう少し読み進めて考えたい。

「変はつた道中双六」を見た千之丞が養を振ると、

「ほんにこれは夢ではないか。双六の絵と思うたうち八橋。まあいつの間に来たことやら。をつと危ない手を伸ばし花を取るとて落ちてはならぬ。」

と、二人がいる場所は桑名神社から八橋へ一瞬で移動した。その後、千之丞は萱津の宿に戻って咲二と寝ようとするが、千之丞は咲二に再会する前に出会っていた若狭を見かける。若狭と咲二は瓜二つだったため、咲二は実際には亡くなっている、若狭の体に移ったのではないかと考える。その後、若狭の姉妹である若松が、千之丞の若党を務める智慧助に、実の父親が「三河の国、近江郡で池鯉鮒のこなた芋川といふところ」にいると話し、若狭以外の千之丞、智慧助、若松の

三人で芋川へ向かい、その父親に会う。

ここまでが『今業平』四編に書かれている出来事である。

そして、話は五編へと移り、その冒頭で三人は池鯉鮒にある神社に立ち寄る。

○三河国碧海郡かの千之丞が身を寄せたる麵類屋、石蔵が住まひ芋川より程近き池鯉鮒の宿に古くより鎮まします明神は、由緒正しき御社にて、本社拝殿いかめしく、門前の御手洗には石の橋を架け渡し、その傍らに多宝塔あり。（中略）このみやどころは街道の道端なれば、さは言へど詣づる人はなきにしもあらば、花園長者の妻藤原卿は夫の代参り、鳥居の外より乗り物いて、腰元に奉納のかくを持たせて石橋を渡らんとして後ろを顧み、（藤原卿）「この池には片目の魚がぜひあるといふことなれど、わしはまだ一度も見ず。帰りに涼みかてら手前たちも目付けだしや。」（田粃）「ほんにさうとは承れど、嘘かほんまかどうかやら。片目は知らず。あれあれあれ緋鯉が浮いて参りました。」

この本文には何の神社が書かれていないが、傍線部のとおり、神社には多宝塔や石橋、御手洗があり、その池には片目の魚がいるという噂は、秋里籬島の『東海道名所図会』（寛政九年（一七九七）刊）巻之三「知立神社」項の記述と一致

している¹⁵。そして、彼らはその御手洗から波線部「緋鯉が浮いて」きたのを目にするのである。

このように、仙果が『今業平』五編の冒頭で緋鯉を登場させることができたのは、三編下から話の展開に沿って読者の視点を桑名神社↓池鯉鮒（八橋の杜若）↓知立神社↓鯉へと移るように工夫していたためなのである。

以上のことから、仙果は『今業平』に池鯉鮒のマス目に杜若を描いた道中双六を利用することによって、『伊勢物語』には一切描かれない鯉を登場させることを可能にした。それでは「魔術つかひ」は鯉とどのように結びついているのだろうか。

二、「魔術つかひ」と鯉のつながり

本節では、「魔術つかひ」が登場したのは、鯉と関連性があること、それらは全て仙果の著作活動の影響によるものであることを明らかにする。まずは、五編下の十四丁から描かれる本文の展開を確認しておきたい。

二―、「魔術つかひ」と鯉にまつわる話のあらすじ

將軍義満は咲二と高橋という女を妾にしていたが、二人とも義満ではなく、千之丞を選んだため、薫という女中を妾にする。義満は薫と戯れながら、家来と酒を嗜んでいたところへ肥国屋富作という手品が上手な商人、「魔術つかひ」が現



図7 『今業平』五編上（14ウ-15オ）

れる。そこで、『伊勢物語』五十段「鳥の子」に挿入されている、不思議なこと、ありえないことを詠んだ歌「鳥の子を十をつつ十をはかさぬとも思はぬ人を思ふものかは」「吹く風に去年の桜は散らずともあな頼みがた人の心を」を利用しながら、富作がいくつかの手品を披露する。手品を見た義満は、「かの伊勢物語に弥生の頃楓の紅葉の面白きを女の元へ遣はして春より秋の紅葉せし心を詠みて添へしとあり」と、『伊勢物語』二十段「楓のもみち」の話を引き合いに青葉を

紅葉させるように命令する。すると富作は、

①何やらん口のうちにて唱ふれば、晴れたる空たちまちに一群の雲起こり、はらはら振り出す俄雨。一本の楓にそそぐと、見る間にかたへさしたる大枝の、から紅に染めかくれば、さてさて不思議もあればある。したりやしたりと褒むる声。しばらくは治まらず、こればかりでは御興薄し、今一術、と手を打てば、かの枝自然と中より折れ、富作が前にはたと落つるを取りあげて、件の紅葉一片づつ摘み取りて、お縁先に据ゑたりける水晶の水腹へひらりひらり投げ入れば、木の葉はみるみるひれ赤く、近江の国堅田船木の浦あたりに、紅葉鮒とて秋の末、賞玩する魚に変わって、水に浮き心地よげなる有様なり（図7）

と、青い紅葉を使って雨を降らせたり、赤い紅葉に変えたりした後、紅葉鮒に変える。

そして、義満が、富作にどのようにして手品を学んだのかを尋ねると、富作は、

②師匠と申は琴高（きんかう）とて、鯉使いで名高い仙人周（しゅう）の代の人と申せば、二千年から上の年寄り、それでもやはり三十九あまり四千足らずに見えます。一生舟で暮らす身の上、



図8 『今業平』五編下（16才）

と、二人目の「魔術つかひ」である琴高仙人に学び、身を隠す仙術も学んだと答える。
それを聞いた義満は、

水難逃るる術ばかり習はうとして深入りし、消^{けん}子^しが秘傳^{ひでん}と承る伯陽九仙^{はくやうきゅうせん}の法^{はふ}までも伝へ受けて修行最中、ただ今御覽にそなへしは、子どもたらしにひとしき戯れ、ここにひと月急に覗き、身を隠す仙術を漸く修し得て候が、こればかりはまさかの時、何ぞの役にも立ちませう（図8）

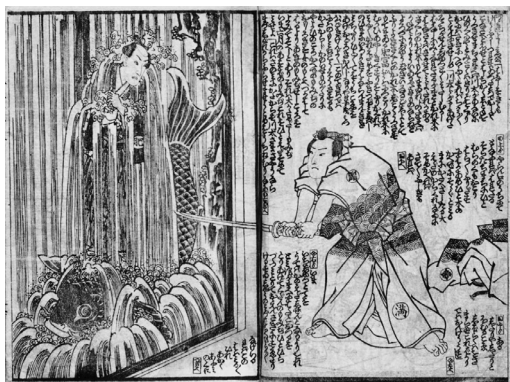


図9 『今業平』五編下（16ウ-17才）

③御佩刀すらりと抜いて富作を二つになれと切りつけ給へば、あら危なやと富作はひらりと身を避け杉戸にそひ描ける鯉の背にまたがり、につこと笑ふて見えつるが、掻き消すごとく失せにけり（図9）
と、富作に切りかかり、富作は杉戸に描かれた鯉に乗り難を逃れる。

義満は富作に、本当に忍術ができるか試したと言い、褒美を与え、ここで富作の話は終了する。

次節からは、本文と合わせて『今業平』に描かれた鯉の図様に注目し、その典拠や影響した先行作品は何かを明らかにしたい。

二―二、山東京山『小桜姫風月奇観』の利用

『今業平』五編の表紙の図様は、左上から流れる川を背景に、鯉がノの字に描かれ、その頭と上に乗った男の顔は左下に向いている（図10）。典拠と考えられる山東京山の読本『小桜姫風月奇観』（文化六年（一八〇九）刊）の口絵の図様は（図11）、右上から流れる川を背景に、鯉がくの字に描かれ、その頭と上に乗った男の顔は右下に向いており、この二つの図様は左右反転した構図になっている。

『小桜姫風月奇観』は、

序幕に平将門を滅ぼした藤原秀郷の近江三上山蜈蚣退治を描く「俵藤太絵巻」を据える。蜈蚣を討った秀郷の末裔に復讐すべく、「蜈蚣の鮮血を吞て一色紅の色をまし」長大になって通力自在になす大緋鯉が、小桜姫を狙って美少年に変身する（中略）化け物と見頭された偽志賀之助は、口裂け「夜叉の如く」「丈たかく身大きく」なつて組子をなぎ倒し、本物の志賀之助に飛びかかる。ここ



図11 『繪本小桜姫風月奇観』
一（口絵）



図10 『今業平』五編上（表紙）

で本物が鯉の精を斬ると（中略）大きな緋鯉は秀郷時代からの話をし、多年の恨みを報うと呪いを吐いて天を飛び去る

という話である。¹⁶ 傍線部の「鯉の精を斬る」場面は、あらすじに挙げた『今業平』五編の本文③と同様であり、これは「鯉つかみ」という、歌舞伎の「巨大な鯉魚の精と勇者が水中で格闘を演じる演技に主眼を置いた演出」である。¹⁷

「鯉つかみ」を用いる歌舞伎に『短夜仇散書』があるが、中村座が江戸で文化十年（一八一三）七月に上演したのが最後であり、この歌舞伎の影響は考えられず、『小桜姫風月奇観』そのものが影響したと考えられる。京山と仙果の関係性を見ると、仙果は京山の作品の副作を次に挙げたとおり、三種類制作しているため、¹⁸ 仙果が京山の他の作品も見ることが可能だったと考えられる。

・『稗史水滸伝』…京山が初編から六編（文政十二年（一八二九）刊）を制作↓仙果が『国字水滸伝』に改題し、十編（天保三年（一八三二）刊）から十二編（天保四年（一八三三）刊）、十四編（天保七年（一八三六）刊）から十七編（天保十三年（一八四二）刊）を副作。

・『琴声美人録』…京山が初編（弘化四年（一八四七）刊）から十六編（安政六年（一八五九）刊）を制作↓仙果が十

七編（文久二年（一八六二）刊）を副作。

・『娘庭訓金鶏』…京山が初編（安政三年（一八五六）刊）から三編（安政五年（一八五八）刊）を制作↓仙果が四・五編（文久元年（一八六一）刊）を副作。

以上のことから、鯉に乗った男の図様の類似性、「鯉つかみ」の利用、そして京山と仙果の繋がりをみると、仙果は『今業平』に『小桜姫風月奇観』の図様と本文を利用したと言える。

二一三、曲亭馬琴『南総里見八犬伝』ブームの影響

次に五編の口絵の図様（図12）を見てみよう。ここには三人の人物と琴が二面描かれている。Aが「有田経之進紀之」、Bが「元嶋原の姉婦薫大夫」、Cが「筑紫の行客肥国屋富作」である。ここから、表紙に描かれた男が「魔術つかひ」の富作であることがわかるが、表紙と違うのは、鯉が上を向いていることであり、二面の琴を滝と見立てると、「鯉の滝登り」という、「崑崙山に源を発し、積石山をへて流れ出た黄河は龍門で滝を造る。その滝を登った鯉は龍に変じるといふ伝えから、立身出世の兆しとして古来好まれた画題」である。¹⁹ また、人が鯉に乗るとい図様は、「琴高仙人」という画題²⁰で、同じ人物があらすじの本文②に登場する。『今業平』では富作が鯉に乗っているという違いはあるが、同じ「魔術つかひ」という点で、「琴高仙人」という画題が影響してい

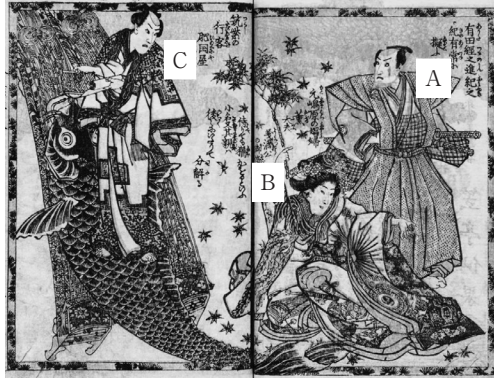


図12 『今業平』五編上（1ウ-2オ）

ることは事実である。このように、仙果は、浮世絵に見られる鯉に関連する画題を全て用いて「魔術つかひ」と鯉にまつわる話を構成していることがわかる。このような話を取り入れたきっかけは何であつたのだろうか。

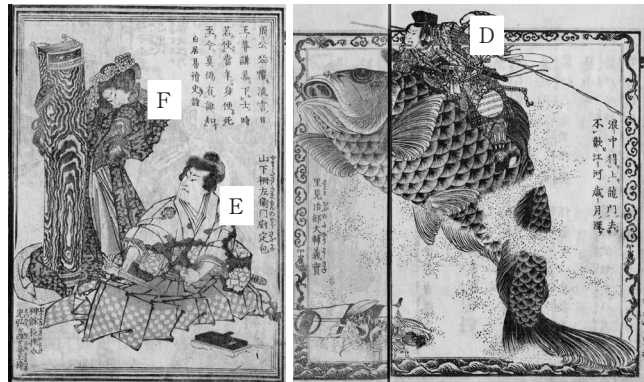


図13 『南総里見八犬伝』肇輯卷之一（4ウ-5ウ）

ここで、曲亭馬琴の読本『南総里見八犬伝』（文化十一年（一八一四）十一月肇輯刊）（以下、『八犬伝』）の肇輯の影響を考えてみたい。まず、口絵に描かれた人物を確認する（図13）。Dが「里見治部大輔義實」、Eが「山下柵左衛門尉定包」、F

が「神餘長狭介光弘が嬖妾玉梓」である。『今業平』と『八犬伝』の口絵は全く類似していないが、一つの要素は類似していると考えられる。それは、上を向いている鯉に男が乗っているという点である。この点から『今業平』五編の刊行に『八犬伝』が影響していることを考えていきたい。

『八犬伝』の肇輯の冒頭は、

嘉吉元年（一四四二）、下総結城城に敗戦したD里見義実は郎党杉倉氏元・堀内貞行と共に戦場を逃れて安房に渡った。義実は安房の国主であつた神余（じんよ）の遺臣金碗（かなまり）孝吉に擁せられ、神余を篡奪したE山下定包（さだかね）を滅した。義実は孝吉に説得されて、助命を乞うF定包の妾玉梓を処刑した。玉梓は里見の児孫を畜生道に導き犬にしようと詛いの言葉を吐いて死んだ。

という話で、『今業平』との類似点は一切ない。

しかし、義実が鯉に乗っている様子について、『八犬伝』の口絵に書かれている「浪中得龍門去 不歎江河歲月深」と合わせて、

①登竜門の故事を踏まえて、里見家の将来の興隆を暗示する絵。②義実が鯉を探し求める話が第三回にある。句

は、義実の乗った鯉は波の中を龍門に上り、龍になるとができて、河が深いことや歳月がかかることを嘆く必要が無い、の意。③鯉に乗る構図は、琴高仙人（鯉に乗って水中より現れる仙人）のそれに基づく

と指摘されていることは見逃せないだろう。

傍線部①の「登竜門」の要素は、前述のとおり、「鯉の滝登り」という画題を表し、『今業平』五編の口絵に加え、あらすじの本文①、富作の手品を見ている義満らの背後にある襖に描かれた鯉（図7-A）も同じである。この図様は、『八犬伝』を抄録した仙果の合巻『雪梅芳譚犬の草紙』五編上（嘉



図7-A



図14 『雪梅芳譚犬の草紙』
五編上（表紙）

永二年（一八四九）刊（以下、『犬の草紙』）の表紙にも描かれており（図14）、『今業平』刊行前には既に登竜門を表す「鯉の滝登り」を仙果自身の作品に取り入れていたことがわかる。

傍線部②の「義実が鯉を探し求める話」は、『忠義水滸伝』第十一回「朱貴水亭施號箭 林冲雪夜上梁山」、梁山泊の頭領王倫が仲間入りを頼む林冲に対して、（中略）三日以内に投名状になるものを持つて来るように要求する話の翻案である」と指摘されており、この『忠義水滸伝』を仙果が読んでいたことは仙果の著作活動からも明らかである。例えば、『傾城水滸伝』（文政八年（一八二五）初編刊）は、馬琴が『忠

義水滸伝』の豪傑を女にとりかえて、原作第五十七回までをかなり忠実に巧妙に翻案」し、没後は仙果が「曲亭翁遺案」と銘うち、『女水滸伝』と題して、十三編下帙から十五編まで二十巻を補作、三世豊国・二世国貞画で嘉永三年（一八五〇）—安政二年（一八五五）に大黒屋平吉から刊行した「合巻であり、京山と仙果の繋がりででも取り上げた『釋史水滸伝』も、「中国小説『忠義水滸伝』を抄訳して合巻に仕立てた大衆版」であるように、仙果が『八犬伝』における鯉の話の題材となった『忠義水滸伝』を読んでいたことは、仙果の、特に嗣作を見て行けば明らかである。

傍線部③の男が鯉に乗る構図が琴高仙人を暗示しているというのは、これまで確認してきたとおり、『今業平』にも琴高仙人が登場していることと共通している。

以上のことから、『今業平』に『八犬伝』が影響した可能性は非常に高いと考えられる。

加えて、仙果が『八犬伝』の要素を利用した理由は他にもある。登竜門を表す鯉が表紙に描かれた『犬の草紙』を含む、『八犬伝』をめぐる当時の状況についても触れなければならぬだろう。

『犬の草紙』については、佐藤至子が、

この二作（筆者注…『犬の草紙』と、もう一つの抄録本である二代目為永春水・曲亭琴童・仮名垣魯文が書いた

『仮名読八犬伝』（弘化五年（嘉永元年、一八四八）―慶応四年（一八六八）刊、初編―二十七編は丁子屋平兵衛板、二十八編―三十一編は広岡屋幸助板）（以下、『仮名読』）は同時期に出版され、結果として読本を読まない（読めない）人々にも「八犬伝」の世界が浸透することとなった点が評価されている。（中略）薦屋吉蔵が『八犬伝』を合巻化するという噂を『八犬伝』の版元である丁子屋平兵衛が聞きつけ、対抗意識を燃やしたことから、二作が競うように出版される事態となった

と、⁽²⁶⁾『今業平』初編より二年早い嘉永元年（一八四八）に『八犬伝』の合巻が二種類刊行され、『八犬伝』が浸透する契機となったと指摘している。これらの刊行による周囲への影響については、向井信夫が、

馬琴が歿してから四年目の嘉永五年（一八五二）、江戸市村座の春狂言は、三世桜田治助の脚本で「里見八犬伝」を上演した。「八犬伝」狂言は天保九年の同座での上演以来十四年ぶりのことである。（中略）無人芝居にも拘らず大入りとなった。

豊芥子はこの大当りを予想外のこととしているが、上演の企画にはある程度の成算があったものではあるまいか。（筆者注：『犬の草紙』と『仮名読』の売れ行きを競い合っ

ていたことを取り上げ）、この時に当たっての「八犬伝」上演の成功は結果論とは云え、寧ろ当然であった

と、狂言の客入りに影響を及ぼしていたことが指摘している。⁽²⁷⁾以上のことから、仙果が『今業平』五編の口絵や挿絵、本文に『八犬伝』の要素を取り入れたのは、『犬の草紙』を仙果自身が制作し、『仮名読』と競い合っていたことによる『八犬伝』ブームが影響したのである。

さいごに

本稿の冒頭で述べたとおり、『今業平』の初編から四編は『伊勢物語』の初段から九段を利用しており、合巻として長編化するために仙果が利用した先行作品も『伊勢物語』に関連する作品を利用していたことに比べると、『今業平』五編の鯉にまつわる話は『伊勢物語』とは一切関係がない先行作品の、いわば切り貼りである。また、鯉にまつわる話が描かれたのが五編下の十四丁裏から十九丁表の僅か五丁分と、一編が二十丁で構成されている割にはかなり少ない印象がある。

しかし、この五丁分に描かれた話が、五編全体のハイライトであったことは、五編上の口絵に鯉に乗った富作と薫が描かれていることから明らかである。仙果は五編上の口絵に富作と薫、鯉が描いていながら、それに関連する話は十数丁先に登場させているのである。そして、この話を五編のハイ

ライトとしたのは、前述のとおり、『今業平』初編の刊行以前からによる『八犬伝』ブームの影響が非常に大きいのである。

では、『八犬伝』ブームとは言え、当時『伊勢物語』を合巻化となった場合に他の戯作者が手掛けたとしても同じ先行作品を利用しただろうか。おそらく初編から四編に見られるような、『好色一代男』や『けいせい浅間嶽』といった先行作品は、仙果に限らず利用する可能性は非常に高いとしても、京山や馬琴の読本と同じ作品を利用する可能性は非常に低いのではないだろうか。

「魔術つかひ」は六編の最後にも登場するが、鯉にまつわる話は五編のみでしか見られない。仙果は「魔術つかひ」を説明するために「鯉の滝登り」、「鯉つかみ」、「琴高仙人」といった鯉に関連する画題を全て利用したが、これらの画題を利用しなくても話の展開には影響しない。しかし、ここで利用された先行作品は、全て仙果が嗣作を多く手掛けた実績によるものであることがわかる。『八犬伝』ブームと仙果のそれまでの著作活動が影響して『今業平』五編に「魔術つかひ」と鯉にまつわる話を登場させることに至ったのである。

【注】

- (1) 国立国会図書館デジタルコレクション（請求番号：208-724
DOI: 10.11501/8942755-10.11501/8942756）

- (2) 中村幸彦「1 伊勢物語と近世文学」（『中村幸彦著述集 第三巻 近世文学と戯稿』「八 古典と近世文学」より、中央公論社、一九九〇年）

- (3) 『足利絹手染紫』（全二十一編中、六編から二十一編を担当、嘉永三年（一八五〇）以降刊）、『其由縁鄙廻梯』（全二十三編中、十二編から二十三編を担当、嘉永八年（一八五五）以降刊）、『薄紫宇治曙』（全八編中、仙果は七編と八編を担当、安政二年（一八五五）以降刊）がある。これらの作品の先行研究としては、内村和至の「『足利絹手染紫』について」（『修紫田舎源氏』続編の作者達）（『明治大学日本文学』十四号、一九八六年八月）と、同「薄紫宇治曙」について（『修紫田舎源氏』続編の作者達）（『文芸研究』七十七号、一九九七年三月）がある。

- (4) 拙稿『今業平昔面影』における考証随筆と西鶴作品の利用（『詞林』七十五号、二〇二四年四月）・同「『今業平昔面影』における『伊勢物語』八段「浅間の嶽」と反魂香」（『上方文藝研究』二十一号、二〇二四年六月）。なお、この二本の拙稿では、現存する『今業平』を五編二十巻としていたが、その後六編二十四巻であることが判明した。また、後者の拙稿において、仙果が「尾張名所図会」に目を通した可能性が高いのは、「尾張名所図会」の挿絵を仙果の師である森高雅が担当したためとしたが、石川了「笠亭仙果年譜」（『日本書誌学大系』104 青裳堂書店、二〇一五年）によると、天保十四年に『尾張名所図会』の編者の一人である野口道直と本の貸し借りが行なわれていたこと、「尾張名所図会」巻七「日光川」項に「高橋広道」の名で仙果の和歌が一首入集されていることが判明しているとの指摘をいただき、仙果自身が「尾張名所図会」の制作に携わっていた可能性は高いという考え

に至った。

(5) (2) に同じ。中村は「作者もこの短篇の歌物語を、如何にして長篇の筋の物語に化するかを嘆じている」と述べている。

(6) 柳亭種彦『還魂紙料』上「七 浄土鑑六附治良及六治良紋楊枝道中双六」項（文政九年（一八二六）刊、西村屋与八板）（木村三四吾著「木村三四吾著作集Ⅳ資料篇 藝文余韻―江戸の書物」、八木書店、二〇〇〇年）

(7) 山本正勝「雙六遊考5 道中雙六その一」（『日本美術工芸』五七二号、一九八六年五月）

(8) ①岩波書店、伊原敏郎『歌舞伎年表』第五卷（昭和35年刊）、第八卷（昭和38年）、②八木書店、義太夫年表近世篇索引刊行会『義太夫年表』第三卷上（天保弘化）（昭和56年）、第三卷下（嘉永（慶応）（昭和57年）、別巻（索引編）（平成二年）、③立命館大学ARC「日本芸能・演劇 総合上演年表データベース」

(9) 『日本古典文学大辞典』「丹波与作待夜の小屋節」項（執筆・原道生）に、「三卷。浄瑠璃。近松門左衛門作。再演三演に際し「丹波与作」「伊達染手綱」と改題。「丹波与作伊達染手綱」と題した本もある。「浄瑠璃の代表的な改作物には、本作上の巻をほとんどそのままの形で踏襲した吉田冠子・三好松洛合作の『恋女房染分手綱』（宝暦元年（一七五二）二月）がある。これも続いて歌舞伎化され、以後浄瑠璃・歌舞伎ともに、この方が広く行われて多くの書き替え狂言が作られた」とある。

(10) 国立劇場調査養成部芸能調査室編『国立劇場上演資料集174（国姓爺合戦・碁盤太平記・天網島時雨の炬燵・恋女房染分手綱）』（国立劇場調査養成部芸能調査室刊、一九八〇年）

(11) 大橋正叔校注『丹波与作待夜のこむろぶし』（新編日本古典

文学全集74『近松門左衛門集①』小学館、一九九七年）

(12) 吉丸雄哉「二節 三馬と浮世草子」（『式亭三馬とその周辺』第二章 戯作の種々相より、新典社、二〇一一年）によると、「忠孝振分道中双六」は浮世草子「八文字屋本「丹波与作無間鐘」（元文四年）を利用」したと述べている。その特徴について、本田康雄氏の『式亭三馬の文芸』から「歌舞伎「恋女房染分手綱」の趣向取りを諷しながら、実際には歌舞伎よりも八文字屋本の「丹波与作無間鐘」に依拠し、「大略丸写し」であること」と、「恋女房染分手綱」の合巻化を三馬が企画したのは、文化五年九月二十四日より中村座で「恋女房染分手綱」が上演されたためであろうこと」を紹介している。（筆者注：「丹波与作無間鐘」は「丹波与作待夜の小屋節」に無間の鐘の趣向を取り入れた多田南嶺作の浮世草子）

(13) 幸堂得知校訂『種彦短篇傑作集』（博文堂、一九〇二年）を底本とし、ルビは専修大学本（国書データベース、請求番号…DG-SUN-00796）を参照した。序文に、「丹波与作が原本をちよつと假寝の大磯に。小萬といへる御職株戀の重荷をのせてくる。馬方の八藏が。親の敵と白柄の鎧。其夜は雪のふり袖を。留てつくるふ藝子のいろは。本妻定めの雙六を。ふつて湧たる欲び顔。（以下略）」とある。

(14) 国立国会図書館デジタルコレクション、請求番号…207-1503、DOI: 10.11501/10301090。序文に、「【簀討道中雙六自序 五十三驛の皇州とは。黄庭堅が旅中題の詩にて。是こそ五十三次とは。平安堂が伊達輻の文なり。彼輻作にはあらねども。予もおなじ戯作の馬追。鞭にあづけた筆の軸□心の駒をしきりに駆て。悪聲の（中略）御伽に綴る簀討の。趣向も長き東海道。（以下略）」

とある。

- (15) 早稲田大学古典籍総合データベース、請求番号…文庫30 E0205。ここに、「多宝塔」社頭にあり傳云嘉祥三年建之云云九輪の臺に山岡忠左衛門とありこれ再建の願主といふ」、「石橋神離の外にあり池を御手洗といふ片目の魚ありとなん」とある。
- (16) 津田真弓「江戸戯作を泳ぐ鯉―琴高・端午・瀧昇り・鯉掴み」(鈴木健一編『鳥獣虫魚の文学史―日本古典の自然観4魚の巻』三弥井書店、二〇一二年)
- (17) 鈴木重三「第四巻 画題―説話・伝説・戯曲―」(原色浮世絵大百科事典編集委員会編『原色浮世絵大百科事典』大修館書店、一九八一年)「鯉つかみ」項
- (18) 国書データベース参照
- (19) (17) に同じ。「鯉の滝登り」項
- (20) (17) に同じ。「琴高仙人」項
- (21) 『日本古典文学大辞典』「南総里見八犬伝」項(執筆…浜田啓介)
- (22) 徳田武「第一章 里見家の勃興」(『浮世絵師の絵で読む八犬伝 上』より、勉誠出版、二〇一七年)
- (23) (22) に同じ。
- (24) 『日本古典文学大辞典』「傾城水滸伝」項(執筆…水野稔)
- (25) 『日本古典文学大辞典』「稗史水滸伝」項(執筆…水野稔)
- (26) 佐藤至子「第二章 読本と合巻―『雪梅芳譚犬の草紙』『仮名読八犬伝』(『幕末の合巻―江戸文学の終焉と転生』「第四部 越境する合巻」より、岩波書店、二〇二四年)
- (27) 向井信夫「嘉永五年里見八犬伝上演の周辺」(『江戸文藝叢話』八木書店、一九九五年)

【挿図出典】

- (図1)、(図7) (図10)、(図12)、国立国会図書館デジタルコレクション、請求番号: 208-724 DOI: 10.11501/8942756
- (図2) 国書データベース、請求番号: DIG-SSDL-50419
- (図3) 国立国会図書館デジタルコレクション、請求番号: 本別9-27, DOI: 10.11501/1310707
- (図4) 国立国会図書館デジタルコレクション、請求番号: 本別9-27, DOI: 10.11501/1310699
- (図5) 早稲田大学演劇博物館所蔵、作品番号: 006-4223
- (図6) 早稲田大学演劇博物館所蔵、作品番号: 005-0403
- (図11) 国立国会図書館デジタルコレクション、請求番号: 147-53, DOI: 10.11501/878383
- (図13) 国立国会図書館デジタルコレクション、請求番号: 本別3-2, DOI: 10.11501/2546338
- (図14) 早稲田大学図書館蔵、請求番号: 文庫31 E0365

引用した『今業平昔面影』の本文は、翻刻したものに適宜句読点や濁点、「」を付し、セリフの語者を「」の前に()で示した。また、作品を引用する際、範読不明な文字は□で表し、振り仮名は影印のままとし、割り書きは「」に入れた。

引用文中の傍線や波線、英字、数字、図番号はすべて筆者が付したものである。

付記

資料の掲載をご許可くださった早稲田大学演劇博物館と早稲田大学図書館に厚く御礼申し上げます。

（ひぐち・じゅんこ 本学大学院博士後期課程）